

視覚を使わずに「浮世絵」を鑑賞するワークショップ

— 触れ、語れ、浮世絵をめぐる知的冒険 —

2009～2010年

視覚を使わずに「浮世絵」を鑑賞するワークショップの運営支援

慶応義塾大学 経済学部 津田眞弓准教授と中野泰志教授の共同研究

<http://www.keio-up.co.jp/np/isbn/9784766418361/>

業務概要

目的

点字を読む事が得意な視覚障害者であっても、図像を自由に認知できる人は少ない。一般に触図を作る時、作画技術を中心に考えるが、このワークショップでは、触図の精度を競うより、「視覚を共有しない相手と共に絵を鑑賞する」というのはどのようなことを考えることを目的に実施した。

概要

課題の浮世絵を視覚障害者と共に鑑賞するため、どの様に何を伝えるのか、鑑賞したい相手の意をどの様に汲むのかを体験するために、次の2点のワークを行った。

- ① 絵を鑑賞するために必要なナレーションを作文
- ② 浮世絵をトレースして、立体コピーし、触図を作成。

実施日は2009年8月18日、8月27日、2010年3月20日の3回、参加者は各回15～25名（視覚障害者、学生、院生、一般の方等）である。

経緯

津田准教授と中野教授の共同研究を実施するにあたり、視覚の障害を理解した上で、ワークショップ運営を支援する専門家として参加



※今回のワークショップ等についてまとめた本。慶應義塾大学出版会より市販されている。

ワークショッププログラムの概要（1回4時間）

※ 視覚障害者が各班に1人以上になるように、1班5～7人で3～4班に編成した。

① 主旨・プログラムの説明・自己紹介

② ミニ講義：視覚を使わない絵の鑑賞体験

2人1組になり、1人がアイマスクをする。アイマスクをしていない人がアイマスクをした人に例題の絵について言葉のみで説明し、絵をイメージし、その後視覚で見てギャップを体験する

③ ミニ講義：絵を言葉で語る

日本文学の専門家が、絵から受ける印象を含めた文章を朗読した。その結果、絵を鑑賞するためには絵の構図や書かれた姿の説明のみではなく、印象や感想も含むものであることを理解した

④ 言葉を補完する触図（鑑賞ツール）の作成

絵の鑑賞について、視覚障害者本人と話し合っって触図とナレーションを作成する

⑤ 触図体験によるプレゼンテーション

- ・各作品を他の班のメンバーが触知鑑賞体験
- ・視覚障害者以外はアイマスクをして、ナレーションを聞きながら触図を触る。
- ・プレゼンターはナレーションを朗読し、触る方法もあわせて解説もする。



参加メンバーが作成した触図（鑑賞ツール）の例

1つの絵を複数の触図に分解して説明するアイデアの例



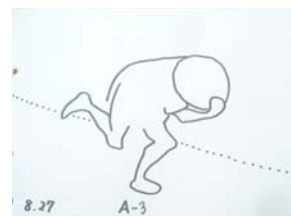
① 原図



② 雨のすごさを表現



③ 人の歩いている姿のみ表現



④ 駆け足の人のみ拡大して表現